



訪問カレッジ「Be Prau」

I'm here !

**“卒業”は、生活の場から社会とつながり直すとき。
その実現を、私たちは使命として引き受ける。**

もしあなたが、「ことばを話す」以外の方法で周囲とやりとりし、
医療的ケアを必要としながら、体調に細心の注意を払い、
日々の多くをベッドの上で過ごしているとしたら——。
世の中には、実際にそのような暮らしをされている方々がいます。
ところが、その方々は特別支援学校を卒業した途端に、
日常的な刺激や情報、新しい学び、
そして社会とのつながりが急激に少なくなりがちです。
一般に「生涯学習」と聞くと、リスキリングや趣味など、
日常に“プラスアルファ”を加える学びを思い浮かべるかもしれませんが、
けれど彼らにとっての学びは、私たちにとって当たり前保障されている、
出会う機会、触れる情報、選べる選択肢そのものです。
世界と出会い、感じ、興味が芽生え、意思が立ち上がっていく
——その時間と回路をつくること。
暮らしの場へ訪ね、出会いを生み、経験を共有すること。
それが、訪問カレッジ「Be Prau」の使命です。



あなたの世界は、出会いで広がる。



あなたの内面は、関係性でひろく。

I'm Proud of you !
Be Proud of yourself !
Be the world we can be proud of !

カレッジ理念

あなたのいのち わたしのいのち
そこに在るすべてのいのちを誇りに思います

あなたの「生き方」「思い」を
くみとる支援をします

あなたのいのちが輝けるよう
生涯にわたる「学び」の支援をします

あなたの「学び」を支援することを通して
地域のたくさんの人と
ゆるやかであたたかな繋がりを築き
「学び合い」ます

包摂社会とは、「誰かを“含めていく”社会」だと語られがちです。インクルーシブ教育も生涯学習も、いつのまにか「超重症児者を、どうやって参加させるか」という設計論に寄っていきます。けれど、その問いを立てた瞬間に、私たちは見落としてしまうものがあります。彼らは最初からここにいる、という事実です。多様性は“足す”ものではなく、すでにそこに在るもの。合わないのは人ではなく、マジョリティが作った「あたりまえ」の枠組みのほうです。その枠に当てはまらない人が、無意識のうちに排除され、困りごと自体が見えなくなっている——それが、私たちが向き合う現実です。

たとえば「18歳の壁」が語られるとき、制度の切替や受け皿の不足が中心になります。もちろんそれも重要です。でも、その議論が“通う”を前提に進むほど、そもそも外出や通所が成り立ちにくい人の暮らしは輪郭を失いがちです。見えないものは、議題にもなりません。議題にならないければ、社会は調整を始められない。ここに無意識の排除の仕組みがあります。

Be Prauは生涯学習支援事業として活動していますが、私たちが扱っているのは「スキルアップ」や「人生のプラスアルファ」としての学びではありません。多くの時間をベッドの上で過ごし、社会との接点が「訪ねてきてくれる人」に左右されやすい暮らしの中で必要なのは、情報に触れ、刺激に出会い、誰かと関わりながら関係性を育てていく機会です。さらに、選択肢が届き、「うれしい／いやだ」「これがいい／ちがう」「もう少し／ここまで」といった形で、自分の輪郭を少しずつ確かめていける環境でもあります。そして、このような暮らしをする人たちが同じ地域に「いる」という事実を知り、出会い直すことは、「支援が必要な人がいる」と理解することにとどまらず、私たち自身の価値観や“当たり前”を問い直す契機にもなります。学びを余暇や自己実現の上乗せとしてではなく、誰もが社会の中で生きるための土台として捉え直す——その再定義は、特定の誰かのためだけでなく、私たち全員に関わっているのです。



I'm Proud of you !
Be Proud of yourself !
Be the world we can be proud of !



「あらゆる人を含める前提で設計する」——それは理想ではなく、社会の標準にするべき思考です。ただし、前提に入れるには、まず“存在を知っている”必要があります。知らないままでは、同じテーブルに着くことすらできません。外に出られる人、声が届きやすい人を基準に作られた議論の席から、そもそも呼ばれていない人がいる。その可能性を想像できるかどうか、インクルーシブの入口になります。「知らない」ことを責めるのではなく、「知らないかもしれない」を前提に設計する想像力が、包摂を“特別な配慮”ではなく、社会の当たり前の条件として組み込むための出発点になります。

そして、その想像力を“現実の回路”に変えるには、まず本人の表出がこちらに届き、応答されることが欠かせません。その土台となるのが、コミュニケーションです。コミュニケーションは、人が社会の中で生きていくうえで最も基礎的で、欠かすことのできない営みです。にもかかわらず、そのための支援や環境が十分に整っていません。ことばによらない表出が受け止められず、結果として「意思がないかのように」扱われてしまう場面があります。そこにあるのはご本人側の“欠如”ではなく、社会の側の“当たり前”と支援の不足が生む誤解や偏見です。そこで必要なことは、特別な配慮の上乗せではなく、誤解が生まれない最低限の仕組み——表出が届き、応答される入口を整えることです。その具体例が、入力機器や環境調整、非言語の応答の文化を含むコミュニケーション支援だと考えています。

Be Prauは、少しずつですが、カレッジ生それぞれのオリジナルの学びと、学びの場で編まれる関係性の手触りを地域にひらいてきました。ご本人の微細な表出に応答・提案する中で、ご本人の“選択”や“経験”が生まれ、その積み重ねによって、「この人はこう感じるのか」「この瞬間が心地よいのか」という輪郭が、関わりの中で立ち上がってきます。そこには、本人と周囲のあいだに情動が往復し、応答によって関係が更新され続ける“接面”が生まれています。その接面の中で、見えにくかった主体が少しずつ立ち現れてくると、いつも“支援される人”として語られてきた彼らは、“社会を共に生きる人”として立ち現れ、学びは“共に編むもの”へと変わっていきます。カレッジ開校以来、この2年間の実践で芽生えた、地域にひらかれた関わり回路と小さな広がりやを、途切れさせないこと。私たちはこれからも、訪ね、出会い、応答し続け、日々の手触りを確かめながら、あきらめずに、この地道な積み重ねを続けていきます。



“支援”から“学び合い”へ、関係性を編み直す

「“学び”がひらく、地域との出会い」

はたらく部会イベント

「支援付き意思決定 関りの作法」

さいたま市岩槻区はたらく部会は、学校卒業後に地域で暮らす人を支える生活介護・就労支援などの事業所が集まり、学び合いの場をつくるネットワークです。Be Prauは障害福祉サービス事業所ではありませんが、地域生活を支える立場として参画しています。

部会イベントでは、Be Prauが講義「支援付き意思決定 関りの作法ー大切な人との関係性を編み直すー」を担当しました。支援を「何をするか（Doing）」の技術だけでなく、「どう在るか（Being）」を問い直す時間として、私たちの中にある無意識の線引きや社会規範の内面化を言語化。さらに、ことばによらないコミュニケーションを楽しいワークで体験し、関係性を編み直す視点を参加者と共有しました。



今日からやってみたく
イメージが湧いた

あまりないテーマで
勉強になった

自分の心と対話した
ものの見方を振り返るこ
とができた

“大切な人のコミュニケーション”を地域で支える
スイッチ講座&ゲーム大会開催



何気ない動きにも
意味がある！

新しい機器を知って
有意義だった！

工夫次第でいろんな
ことができる！

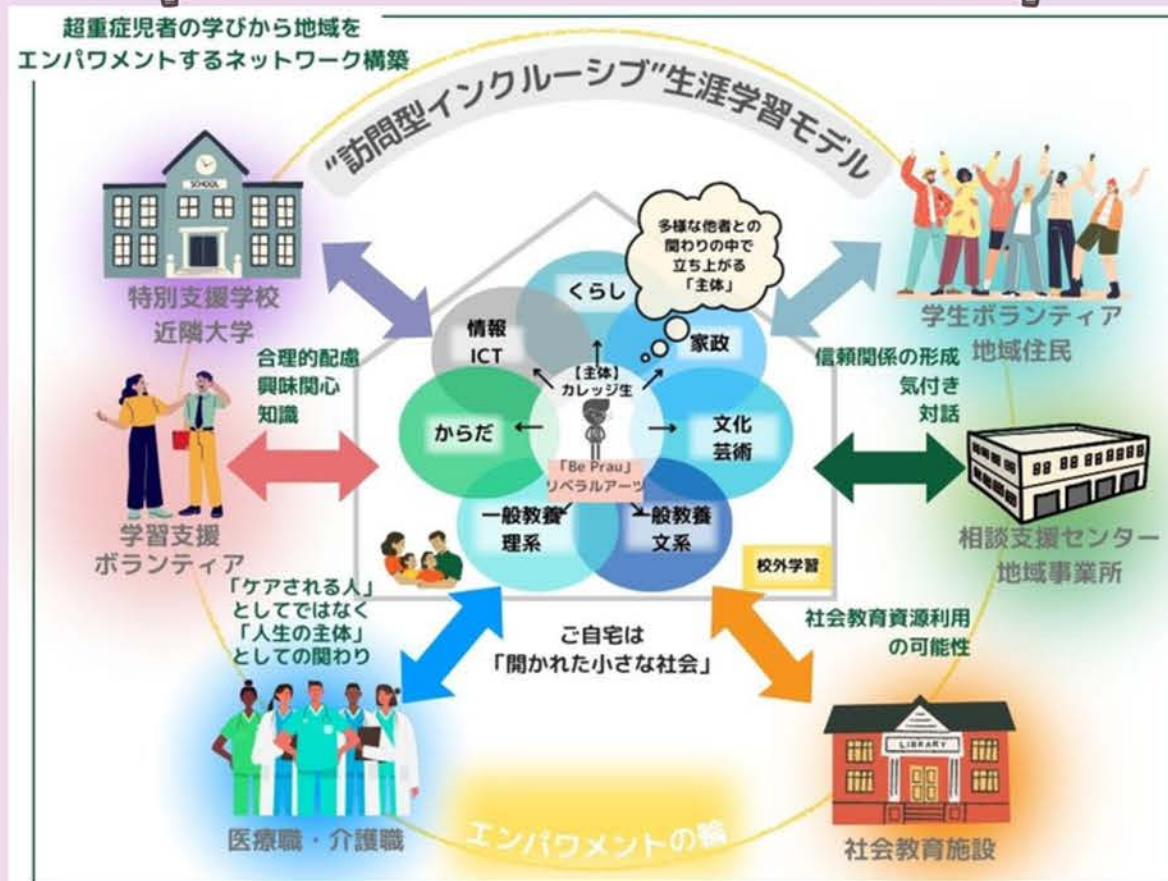
いつもよりたくさ
ん表出してる！

“自分でできる、が世界を変える”から
“自分でできる。が世界を変える”へ

自分の思いどおりに身体を動かしたり、ことばで伝えることが難しい人ほど、本来は最も厚いコミュニケーション支援が必要です。しかし現場には「必要ない」「できるはずがない」という決めつけが残り、使える入力機器（スイッチ）に出会えないことも少なくありません。

そこでBe Prauは、一人ひとりに合ったスイッチ選定を地域で支え、スイッチで楽器を鳴らしたり、ピッチングマシンでボールを投げたりと、「自分でできる楽しさ」「みんなで楽しむ喜び」を体感できるイベントを開催しました。こうした入力へのアクセス保障を、特別な配慮ではなくコミュニケーションの基盤、ひいては教育の基礎として位置づけ、地域で継続していきます。

地域は“出会い”で、できている



I'm Proud of you !

Be Proud of yourself !

Be the world we can be proud of !

地域の支援者対象研修
埼玉県医療的ケア児等支援センター共同開催
「学びマップをつかってみよう」



2021年の医療的ケア児等支援法の成立以降、学校生活や障害福祉サービスなどの環境整備は進んできました。しかし、医療的ケアが必要な重い障害のある方が、自分らしい生き方を実現しやすくなったと言えるでしょうか。支援者は、その未来像を本人とともに描けているでしょうか。

とりわけ、ことばによらないコミュニケーションの場面では「意思疎通の難しさ」や「主体をどう捉えるか」が支援者の大きな悩みになります。そこで医療的ケア児等支援センターと共同で、Be Prauが大切にしている「学びマップ」を用いた研修を開催しました。

研修では「支援する／される」という関係からいったん離れ、社会を生きる人同士として、相手を知りたいという姿勢から出発。わかりにくさを“なかったこと”にせず引き受けながら、時間をかけて関係性を築くプロセスを、ワークショップとして体験していただきました。

参加者からは、ことばに限らない表出を手がかりに、ご本人の意思や気持ちを中心に据えて関わりたいという声が寄せられ、あわせて、訪問カレッジBe Prauは重症心身障害児者の「希望の光」だというご意見もいただきました。その光を確かなものにするために、私たちは「その人らしさ」が地域のなかで実現していく未来に向けて、これからも活動を重ねていきます。



2025年度実践動画
「リベラルアーツ～主体が
立ち上がる学び～」



2025年度実践動画
「学びの場づくりから
地域の編み直しへ」